漱石と英詩英文学

金子健二

漱石と英詩英文学

漱石先生が帝大の英文科で講義していられたころ常に口癖のようにお用いになった言葉の中に「かくかくのことについてどう見るかがまず問題だが」というのがあったことを私は記憶している。そのころ私たちのクラスの上級生であった森巻吉君はおりおりこの口癖を上手にまねて英文科の学生たちを笑わせたものである。私は今この親しみのある言葉を藉りてきて、夏目先生の作品の形式および内容のうえから観察してその全体としての特異

性を、またその作品の価値を「どう見るか」と考えようとするものである。先生が他にもう一つ口癖に言われたのは「シェークスピアーという男は……」であって、このいわゆる「いう男は」が問題となる。もちろんそれは先生の自尊心の高い、気位の高い、そしてまた、西洋人を多少馬鹿にした意味がたぶんに含まれた言葉であることは明らかであるが、しかし、特にシェークスピアーに対して「いう男は」をお用いになったのは、あるいは一種の親しみの意を含ませてのお心持であったのか、それとも「あの得体の知れない英国文壇の謎の男が」という

意味であったのか不明である。だが私は十中八九まで後者の意味であったと想像する。そして先生はこの意味でシェークスピアー以外の他の英国の創作家や評論家をも「〇〇という男は」と呼んでおられたようである。いな、呼んでおられたというよりは、むしろ、そのような見方で彼等を批評的に眺めておられたように想像する。すなわち、ここに夏目先生の諷譏的なまた皮肉な観察の態度が窺われる。

夏目先生は英文学者として、小説家として、評論家として、随筆家として、漢詩および俳句の詩人として、ま

た前半生は教壇の人として、いわば、多方面にわたって大きな業績を残された一人物であった。そしてかくのごとく多方面にわたって、大きな業績を後世に貽(のこ)されたのはもとより先生の叡知そのものの齎した結果ではあるが、英国人の思想的影響もまた、間接ながらも、先生の文学者としての生活を指導するにある種の役割を為したものだと考え得る。英国には古来この型の文学者が多かった。学者であってまた文壇の大きな存在と成った実例は英国に枚挙することができないほど多い。また大文豪として国の内外にその名を識られた人で国内で第一流の

政治家として、あるいは実際生活の各方面で広く大きく活動していた人物もかなり多かった。したがって漱石先生のごとき人物型は、英国文学者の場合にありてはむしろ普通のものに外ならない。新井白石は日本建国以来唯一無二の英国式の大人物であった。漱石先生はもちろん白石に比肩し得べきはずもないが、それにしても日本の小説家としては珍らしいほど学者としての素質と学識とを持っておられた。しかし、先生には英国の著述家のごとき、また新井白石のごとき、規模の大きなものが欠けていたのみならず、大きなまた健全な常識が欠けていた

ことはいうまでもない。

由来英国人の長所の一として世界的に認められている事柄は、いかなる場合に臨んでも中正堅実の常識道を固く守って進むということであり、その主義はともすれば放縦に流れやすい文学者の生活と、またその作品の内容形式が無秩序無統制に堕するのは英国以外の文学国においてあまりにも多く見らるるものであるが英国の文学者にこの弊はほとんどなかった。英国の代表的なジャーナリズムは古来己が伝統の美と称するものを墨守し、決していたずらに時流に媚びて売文の非を犯そうとするもの

はなかった。かつて文豪ウェルズがただ一つの新しい単語を「タイムス」の社説欄の中で不用意に使用したために、読者の詰問と非難を受け、それが原因となって、ついに天下第一の大新聞「ロンドン・タイムス」の編集部から、永久に去らなければならなくなった一例でも明らかであるごとく、ジャーナリズムの措辞文体ですら伝統……健全な常識力が経験の力で築き上げた伝統の威力の前に立ちては作者の自分かっての振舞は決して許されないのである。英国の古い歴史を持った大新聞や文学評論雑誌は、おおむねこの伝統により存在してきたものであ

る。わが国においてこのふうを学んだ新聞は「東京朝日新聞」「国民新聞」「万朝」（ただし社説欄）等であった。なかんずく、「東京朝日新聞」の社説欄は英国型のジャーナリズムの手堅いところを持っていたので「日本のロンドン・タイムス」の名をもって海外に知られていたほどである。文章のスタイルすなわち執筆者の風格の自然的発露は英国ジャーナリズムの編集理念の生命であった。夏目先生の小説、評論、随筆類、その他のいろいろの種類の小品は皆英国式の「スタイル」をもって一貫している。日本文学の発達史上に先生の貢献せられた大き

な事跡は英国文学の風格（スタイル）移植という点にあったと称し得るであろう。それは昔わが国文学が支那の文学に学んで、新たに一つの風格を持つことができたのと同様である。「東京朝日新聞」の英国型のスタイルが年を経るにつれてしだいに純日本式のものと成ったのに比し、夏目先生によりて創始された「スタイル」はわが国文学に、なおまだその大きな影響を与えていないのは事実であるが、これも「時」そのものがその最後の結論を与えてくれると思う。

漱石先生の文学観は日本人的の道徳をたぶんに取り入

れたものであって、この点において、先生の作品はそのころの写実派と称するものの文学的作品と甚しく異っている。先生は日本の写実派は写実という言葉の意味を明らかに認識することなく、いたずらに醜き場面をそのままに描き出すのが写実であると誤解している事実を「文学論」の中において指摘しておらるるほどであって、先生は英国写実派の小説は、日本の場合とはまったく異り、人生のあらゆる生活面において、大きく働いている道徳そのものを常に基督教的思想で巧みに彩色し、かつこれを教訓的に取扱おうとすることをでき得る限り避けんが

ために、いろいろの手法を用いているのはその筆者の苦心のあるところであって、そこに英国写実小説の特色があるのであると説明された。わが国の勧善懲悪主義の昔の小説は英国第十八世紀の写実派の小説に比較するならば明らかに儒教的または仏教的道徳の鼓吹に役立ったものであるが、英国の場合のごとく写実的効果を大きく現していない。夏目先生は、英国写実主義小説家の手法を巧みに取り入れて御自身の小説を書かれたものと想像する。この意味において先生は明らかに日本小説界に純英国型の写実主義小説の長所を活用して新らしい手法を創

始されたものだと考え得るであろう。しかし、先生の写実主義手法は常に先生の理知を背景としたものであるがゆえに、情熱の炎に欠けている。冷たい批判のメスがあまりにも多く心理的解剖の犠牲に成っている。先生の理知の力はともすれば論理と分析との冗漫な過労に濫費されんとする杞憂がある。明治初年においてわが国の写実主義小説に初めて、新らしい意味においての写実主義を創始した坪内逍遥の「書生気質」は、その規模および構想においてきわめて幼稚なものであって、とうていこれを漱石先生の「吾輩は猫である」や「坊っちゃん」にく

らべることができないほど劣っているが、しかも逍遥は決して冗漫な論理と解剖の濫費に堕することはなかった。鷗外もまた西洋式の写実主義を日本文学のうえに徹底させ、またこれを小説界に普及させようとした文豪であったが、しかも、鷗外は漱石先生のごとき冗漫な論理を弄ばなかった。また、分析解剖の煩瑣な外科的手法を鷗外は繰り返さなかった。鷗外はもともと医学の本場ドイツにおいてうんと医学のすぐれた知識を積んできた大家であった。また彼は近代西洋科学のあらゆる種類の知識にも通暁していた学者であった。精神科学と医学との

接触は鷗外ならではわが国のいかなる学者もあえて為し得るものではなかった。鷗外は特にそのメスを一度用いようとさえするならば漱石先生以上に肉体のうえにも精神のうえにも正確にこれを使用することは容易であった。しかるに鷗外はかくのごときことを彼の文学的作品のうえに決して試みなかった。加之（しかのみならず）、鷗外は漱石先生よりははるかに深いまた広い精神文化の知識に富んでいた。しかるにそれにもかかわらず、彼は決して論理の遊戯に陥るがごときことをあえてしなかった。

漱石先生の叡知は人生の奥を徹見しようとするところ

まで進んでいた。先生はこの驚くべき叡知をもって、人間の心の裏面をすら見破ろうと企てられた。しかも、先生は人心の奥に隠されている醜き正体をでき得る限り芸術的に描写しようと苦心されたのである。醜き姿を醜きままに写し出そうとするのはわが国の写実主義派の一般的手法であった。漱石先生の構想とまたその手法はまったくこれと異っていた。しかしながら、先生は先生独自の手法として、常に学者的態度をもって批判的に作中の人物を取扱おうと企てられた。したがって先生の小説は学徒の間に普及性を持っている。もちろん「吾輩は猫で

ある」とか「坊っちゃん」とかいう一見きわめて通俗的な軽い気持ちを与える作品は、少年少女の間にも明らかに歓迎される性質のものであるが、その場合における先生のポピュラリティーすなわち読者から喜ばれる理由は、学徒対象の場合とはまったく異っているのはもちろんである。

漱石先生の学究的思想の根本組織は、すでに私が幾度も繰り返して説明したごとく、先生がロンドンで日夜御精読になったそのころの西洋の心理学書と社会学の参考書から学ばれた知識をもととして、これに自然科学の英

国派の学説や、医学をもととして精神科学を解説しようとしたドイツ学派の英訳書等の中から新たに学ばれた知識であって、先生は、これ等の西洋人の学説を総合して学究的に一つのシステムを創始しようと企てられたのみならず、そのシステムを自己の小説において実現しようと試みられたのである。しかも、そのアンビションはわずかに部分的に成功したのみであって決して大成されなかったのである。おそらく先生もこのことを明らかに意識しておられたであろうと私は想像する。思うに先生がもう一年間か二年間御存命であったならば「明暗」の中

にこの大きなアンビションを実証されたに相違ないと考えられる。かつてフランスのテーンヌが『英国文学史』において民衆心理学と社会学との原理を応用して先人未踏の大規模な著述を書いたが、それはついに失敗の歴史を残したにすぎなかった。しかも、彼の研究法は大きな示唆を彼以後の斯道の学者に与えた。夏目先生もまた、おそらく彼のアンビションを実現しようと考えられたことと思う。しかも、先生はテーンヌのごとく心理学と社会学に造詣が深くなかった。ゆえにその「文学論」はわずかに西洋人の書いたある限られた少数の参考書を短日

月の間に急いでお読みになった程度にすぎなかったことを実事的に告白しておらるるにすぎない。したがって先生が「文学論」の中でいわゆる先生の文学観なるものを御説明にはなっているものの、その御所見が実証的に大きく現われた小説は一つもない。「明暗」以外の多くの小説ないし小品物は決して先生が「文学論」で詳細にお述べになっているお考えを全面的に実証されたものではない。これ等は要するに「明暗」に至るまでの小手しらべであったにすぎない。先生は晩年においてより大なるものが先生の掌中から生れてくることをこれ等の多くの

作品で先触れをされたにすぎない。私たちは不幸にして先生の文豪としての全貌をついに見る機会を恵まれなかったのである。そしてそれはちょうどテーンヌの『英文学史』が筆者の精神の受難の跡を記念する記録に終ったのと類似している。ただ漱石先生が僥倖にもその小手しらべの作品で、一躍して日本文壇の王座をかち得られたことが異った点である。

先生の英文学の御造詣は、少くとも第十八世紀以後の英国小説に関する限り敬服すべきものがあった。しかも、それは先生の御趣味に適するもののみに関しての正確な

知識であった。先生は決して濫読主義で広く浅く読書する軽薄な読書家ではなかった。先生の英文学の知識は実に驚くべき正確さを持ってできていたと私は考える。「狭いが深い」という批評は先生の場合に最も適当する言葉である。それほど先生の英文学者としての態度は良心的であった。しかれどもこの正確な知識は少くともその特殊的なもののみに局限されていたために、ついに「文学論」といったような大きな課題を英文学の全面にわたって解決するには不適当であった。むしろこの課題は「文学評論」、いなそれよりは「英文学評論」とでも銘を打

った書物の中で、解説されたほうがより適当であったと考え得るであろう。私はこのことを考える毎に先生の英文学の視野は不幸にしてあまりに狭かったことを遺憾とする。先生は第十八世紀以前の英文学に関してほとんど考慮を払っておられなかったようにみえる。いわんや中世と古代の英文学においてをやである。ゆえにかくのごとき視野の狭い知識をもって英国人の文学観を全体的に批判しようとする態度は決して妥当でない。先生の英文学観はもちろん先生の優逸した独自的創見を後世の学徒に与えている。しかしながら、それは少くとも「文学評

論」の中で取扱ってあるところの、いわば一小部分の知識の場合においてである。私はこの意味において先生のこの二つの教壇人としての著述は、英文学研究に志すものの中の、特にひととおり英文学の一般にわたりての常識……もちろん専門の知識を指さすのであるが……を高等程度において所有しているものに大きな示唆を与え得るものであるが、初歩の学徒にはあまり役立たない書だと断定する。

次に私は先生の英文でお書きになったものについて考察しようと思う。しかしながら、私は常にいろいろの機

会で幾度も公言していたごとく、日本人の書いた英文や英詩を、その表現技術のうえからかれこれ批評するのは決してほむべきことではなく、またかくのごとき批評を下すことがはたして可能的であるかどうかすら疑っているくらいである。あの大文章家の頼山陽の漢文や漢詩がいかに日本人の目に卓越したものと映じたにせよ、支那の文章家は一言の下に「あんなものはどだいなっていないよ」と嘲笑の言葉で葬っていたのを見ても想像することができるとおり、日本の文学者が外国の文字で外国人らしく己が思想を組み立てて書くということは至難であ

るばかりでなく、たとい、それがある程度まで成功したとしても、どこかに日本人臭い点が残っているのは当然である。特に日本人としての性格をたぶんに所有している文学の場合においてをやである。夏目先生は特に日本人の中でも強靱な日本的特性を持っておられたのだから、その英文や英詩を英国人の作品と比較して論じることは無理である。しかし、いやしくも英語の先生であり、英文学の講義を日本最高の学府で堂々と講じられた以上、その英文や英詩の出来栄えについて後世批評されても致し方はない。私は今、先生のこれ等の英語で書かれ

たものを鷗外のドイツ語で書かれたものに比較してみたい。さすがは鷗外であると思うのはそのドイツ文が実にあかぬけがしている。鷗外がドイツ留学中に発表したドイツの論文または文学的小品はドイツ人ですらこれを称賛していた。あるドイツの文学者はこれが日本人の書いたものだとは想像もしなかったと伝え言われている。しかも、それは鷗外の二十歳代の筆であったから驚く。もちろんドイツ語の文章は英語のごとくその措辞にせよ、スタイルにせよ、英語のごとく複雑でなく、また文章技術のうえに言外の風格または伝統的習慣法が必ずしも要

求されていない。ゆえにドイツ語で文章を綴ることは英語に比してはるかに容易である。英語は英国の古い国民的伝統によりて、造り出されたものであって、そのうえになお、ラテン文化の感化をたぶんに受けて発達した言葉であるから、そしてまた、昔から文章の巧拙を口やかましく論じてきた国民であるから、英国第一流の文章家でも、批評家の口からあげ足をとられた例は多いくらいであって、現在においても英国のジャーナリストがその所論の中で、あるいはまた国会議員が議場で話した演説の中で、その意見の内容よりはむしろその用語なり、発

表の技術についてかれこれ批評され、場合によりてはかの文豪ウェルズがかつて「ロンドン・タイムス」紙上で不用意に使用したたった一つの単語のことから自己の文学者としての責任と、また、天下の大新聞「ロンドン・タイムス」の権威を汚したという責任感からその職を去ったのでもわかるがごとく、英国の読書界は自己の国語の伝統的自負をどこまでも支持しようとする国民である。ゆえにかかる国民の国語を使用して彼等と同等の成績を上げようと考えるだけが大きな思い違いである。ドイツの国語にはこのようなやかましい制約はない。ゆえ

にわが日本の学徒はドイツ文で己が研究を書くことは決して困難な仕事でない。これに反して英文で英国人並に書くことは非常に困難である。高等学校で僅々二三年学んだドイツ語の知識がある程度まで直ぐ役立つのに反して、英語は中学校から高等学校を通じて七八年の長日月を通じて学んでもなおひととおりの知識を掴み、これを実際に役立たせることが困難であるのは、英語そのものの持つ如上の事情に因るものである。漱石先生の英文また英詩はこの理由から鷗外のドイツ文に比して甚しく劣っているとしても止むを得ないであろう。しかし、鷗外

はたとい大文豪であったにしても、漱石のごとく外国文学を専攻し、またそれで生活上の職を得ていたものではない。ゆえに看板の上だけでは漱石先生は鷗外先生以上に立派な外国語の先生であったのだ。私はこの看板を理由として漱石先生の英文と英詩を一瞥する。

漱石先生の英文は決して拙劣ではなかった。しかし、それは決して純粋の垢抜けのした英文ではなかった。先生の理屈好みの癖は英文のうえにも現われている。そして特にその欠点はとかく日本の学者に有りがちな学者的用語と、ペダンティックな表現法である。「文学論」の

中に使用しておらるる先生独自の学術用語にも、この欠点が明らかに現われているごとく、もっと平易なもっと英国人的な普通用語を御使用になったならばと思われるくらい、小むつかしい語彙と言いまわし方があまりにも多く先生の英文に現われている。

さらに目を転じて先生の作られた英詩を通覧するに、その思想は、先生独自の日本詩人としての立場からだと想像し得るにしても、それがいったん英語で書かれるとなると純粋の英詩でもなく、また純粋の日本詩の思想でもなくなる。野口米次郎氏の小詩編「フロム・ジ・イー

スターン・シー」"From the Eastern Sea"は二十代の日本青年ヨネ・ノグチが、そのはつらつたる思想をなんらの誇張もなんらの拘束もなく自由自在に歌ったものであって、そこにはもちろん大きな思想もなく、大きな芸術的アンビションもないが、しかもそれだけ率直で、またそれだけ単純である。特にその英語はリズムを生命としている以外に別に語彙の選択や、古語新語の差別上の研究的考慮を払った痕跡もない。それだけヨネ・ノグチの英文はナイーブである。漱石先生の英語には自責と自我が、そしてまた、英文学者としての高度の教養がかえっ

て邪魔立てをして英語がいやに技巧的になっている。たとえば先生の英詩に次のごときものがある。

Silence

"I hail from the Kingdom of Silence,
Where I knew no sun, no moon,
No man, no woman, nor God even.
I lived in Silence and Silence reigned all.
What a difference to me now! Oh my life!

Once I had a mother,
A fond and tender mother had I,
Who gave me joy and hope and everything bright,
But she is gone now! Oh my life!

Once I was young: I saw a stream of gold,
Bursting open the Gate of Heaven
Flooding all the earth with amber light,
All was mellow, warm and beautiful.
Where is sunshine now? Oh my life!

I seek within and there are voices,
I seek without and there are rushes,
In vain I seek within and without;
Silence is not there ! Oh my life!

Silence!
Ask me why he is so dear?
Because Silence is bliss.
Ask me why Silence is bliss?

Because he is perfect. Oh my life!

Better than the best things are we possess,
Sweeter than love we call divine,
Dearer than Fame, Power and Riches,
I weep for him that is no more. Oh my life!

I look back and I look forward,
I stand on tiptoe on this planet
Forever pendent, and tremble —

A sigh for Silence that is gone,
A tear for Silence that is to come, Oh my life!

［August 1903］

［直訳。「沈黙」に寄するの詩。私は「沈黙の国」から敬意を表する。そこでは私は太陽も知らなかったし、月も知らなかった、男と女も、いな、上帝をすら知らなかった国だ。私は「沈黙」の中に住んでいたのだ。そして「沈黙」はあらゆるものを支配していたのだ。しかるに

今私はなんという異なったところにあるのだろう。ああ、私の人生は！……かつて私には母親というものがあったのだ。私にはばかにかわいがって、そしてやさしく親切にしてくださった母であったが、私はこの母親より歓楽と希望とまたあらゆるかがやかしきものを恵まれていたのだ。しかるに今この母親はおらなくなったのだ。ああ、私の人生は！……かつて私は若かったこともあったのだ。そのころ私は黄金の流れている河を見た。その河はすさまじい勢いで「天国の門」を打破り、全世界に琥珀の光りを隈なく溢れさせたので。あらゆるものは清

く澄みわたり、暖かくまた美しきものとなった。しかるに今その日光はどこへ消えうせたのだろう。ああ、私の人生は！……私は内の方をさがしているが、そこには声のみが聞えて来るだけだ。私は次に外の方をさがしてみると、そこにはさわがしい突進のひびきが聞こえてくるばかりだ。内をさがしても外をさがしても無駄だ。「沈黙」はそこにはいらない。ああ、私の人生は！……「沈黙」よ、「沈黙」がなぜそのように私になつかしいものであるのだかとお問いになりますか。その訳は「沈黙」は幸福だからです。しからばどうしてそれは幸福なので

すか。その訳は「沈黙」は完全無欠だからです。ああ、私の人生は……私たちが所有している最善のものにもまさったもの、また私たちが神聖なものだと呼んでいる愛そのものにもまさって甘きもの、名誉よりも、権力よりも、富貴よりも貴きものは「沈黙」である。しかるに「沈黙」はいまや私のものではなくなったから、それを慕って私は泣いている。ああ、私の人生は……私は後を眺め前を眺める。私はこの惑星の上に趾頭(つまさき)で立っている。永久に宙ぶらりんで、またぶるぶると体を震わせながら……もう居らなくなった「沈黙」を慕って嘆息(ためいき)を吹きな

がら、また再び来るべきはずの「沈黙」に涙をささげながら……、ああ、私の人生は……」

（一九〇三年八月作、明治三十六年夏、東大英文科の教壇に初めて立たれた年にしてすなわち英国から帰朝されたホヤホヤの時であった。私が英文科の一年生の時なり）

私が今この詩を読んですぐ感じたことはインドの詩聖タゴールの詩とすこぶる善く似ていることである。すなわちその思想がどこまでも東洋人的であるのみならず、その詩形が甚しく二者共通しているからである。もちろんタゴールの詩の魅惑的であるのは主としてその音楽的

な音律そのものに大きな原因を有するものであって、これは英国生れの詩人の中でも容易に見出すことのできない長所である。もし仮りにスウィンバーンの詩がリズムの極美をつくしたものであると考え得るならば、タゴールの詩は内容と形式を極度にリズム化したものであると評し得るであろう（拙著『印度視察記ガンジーさんの糸車』の中の「詩聖タゴール翁」の章および『印度』の中の「タゴール翁の人生観」並に「学苑」所載「詩聖タゴール翁の死を哀悼して」等々参照）。……漱石先生の「沈黙」はその基調において英国等十八世紀の冥想的また哲学的抒情詩人

ヤング（拙著『英国自然美文学研究』の第十八世紀の条に評論してあり）の「夜の思い」に共通したものがある。しかしながら漱石先生の「沈黙」はヤングの「生」と「死」と「永遠不滅の霊」に対するその哲学的考察の深みと宗教的信仰の敬虔な情熱的聖火にまったく欠けている。特に先生の文学観は宗教的信仰をまったく考慮の中に入れておられないために、この「沈黙」の一編は強く読者の心を刺激することができないのは遺憾である。タゴールの詩には大きな哲学と宗教がある。漱石先生にはたいした哲学もなかったようにみえるが特に宗教はまったく欠

けている。先生の英詩はタゴール式のパラレリズムすなわち対句式の手法に偶然的一致を見るのみであって、タゴールの詩のリズムが先生の詩に欠けている。

次に私はもう一つ先生の英詩を取り上げて批評することにする。それは前者と同様に先生の瞑想詩編の一つである。

"I rested my head against her heaving bosom.
I cooled my burning forehead on her snowy breast;
She bathed my burning forehead with the amber light

Of her flowing hair, flowing liked reams forlorn :
She supported my feverish head on the downy pillow
Of her soft arms, soft alabaster of serenest hue.

Then came the Twilight ; gliding from afar with love :
Soothing it came and wooingly it wrapped us up
In her thickening light, thinner than the moon.
That etenal Twilight ! That enchantres who lends
Enchantment to everything we see and makes it all violet.

Then came the stars: they seemed to light on her golden head.
They seemed to move on her golden head — one — two — and three.
The three stars moved and glittered there on her golden head
And lit her dreamy hair, dreamily fiowing in the darkness.

The Twilight is violet still; the stars are always three,
Her bosom is heaving, her breast is white even now,
Her hair forever golden; forever flowing like dreams
—

And I? Ask me not who I am; for I am not
What was once thought to be, nor could ever be!"

［November 29, 1903］

〔直訳。私は私の頭を彼女のしだいに高まってくる胸にくっつけて休めた。私は私のだんだん熱くなってくる額

を、彼女の雪のような胸にくっつけて冷やした。彼女は私のだんだん熱くなってくる額を彼女の流るるがごとき頭髪……うら淋しき夢のごとくに流れているその頭髪……の、その琥珀色の光りでひたしてくれた。彼女は私の熱病にでもかかったような頭を彼女の軟かな両腕……澄みきった軟かな雪花石膏のような色をしたその腕の、うぶ毛のごとき軟かな枕の上に支えてくれた。……その時「夕暮」が迫ってきた。遠くからやさしくも静かにすべるがごとき足どりで迫ってきた。「夕暮」はなぐさめるもののごとくに来てくれた。そして媚びるがごとく私

たち二人を掩いかくしてくれた……彼女のだんだん濃くなって来る光りの中に……月光よりも薄いその光り……あの永劫の「夕暮」……私たちが目で見る限りのものに皆ことごとく魅惑の力を貸して、あらゆるものをことごとく菫色にしてしまうところのあの巫女の「夕暮」が来たのだ。……その次に星が現われてきた。星は彼女の黄金色した頭の上に、光りを放とうとしているように見えた。そして彼女の黄金色した頭の上で動いているように見えた……一つ、二つ、そして三つの星が……三つの星は彼女の黄金色した頭の上に動きまたぴかりぴかりと輝

いた。そして彼女の夢のような頭髪……夢のような闇の中に流れている彼女のその頭髪をてらした。……「夕暮」の色はなお依然として菫色である。れいの星も依然として三つだけである。……彼女の胸はだんだんたかまるばかりである。彼女の胸は今でも依然として白い、また彼女の頭髪も永久に黄金色である。そして永久に夢のように流れている……では私はどうか？……私が誰であるかと私に問うことを止めてもらいたい。なぜといって私は今はかつてその昔、かくありたいと考えていたものでもなく、またいつかはそうあり得たかもしれなかったもの

でもないのだから……」（一九〇三年十一月二十九日作）

この詩もまた漱石先生が大学の教壇に初めて立たれた年すなわち明治三十六年の作である。この外にもなお、同じ年にお書きになった英詩が数種ある。いずれも短いものばかりである。先生はこのころ英詩を作ることにこり出してこられたのではなかったかとさえ考えられる。何かの動機からこの方面へのアンビションが起きてきたのだろう。「夕暮」すなわち「薄明」の詩は「沈黙」の詩に比較するならば西洋臭くなっている。冥想的の印象派の詩人の作を思い出させるような口吻に満ちている。

しかしこの詩はだいたいにおいて主観的の、そして特に抽象的の思想から作られたものではあるが、ここにも漱石先生の理知の力と理屈好きの習癖が明らかに現われている。したがって、内容は整然としていて、なんらの矛盾もなんらの晦渋もなく、理路一貫し意義明確である。しかしながら、それにもかかわらず、せっかくの「愛」の詩が情熱をまったく失っている。ロゼッティやブレークの主情主義ないし印象主義の「愛」の詩に、一見似たところの多いこの「夕暮」の一編は、その全体の調子がすこぶる気品が高く、かつ印象的であるにもかかわらず、

若き男女の美しき「愛」を取扱った詩としては「熱」に不足している。ロゼッティーやブレークやスウィンバーンにもこの種の詩はかなり多いが、これ等の英国詩人は決して漱石先生のごとく理知の目で「愛」を歌っておらない。先生の「愛」はともすればプラトニック・ラブに傾こうとしている。先生はこの詩の中で「三つの星」だとか、「夢のような頭髪」だとか、「夢のごとく流るる」とか、「琥珀の光り」だとか、「軟かな雪花石膏」だとか、美しい言葉を巧みに使用しておられる。先生の文学創作技術は常に先生の非常な鋭敏な理知の判断をもとと

して行われる。ゆえに一般に詩人が為すような主情的な態度でほとんど無自覚的に情緒を発露させてゆくといったことは、少くとも漱石先生のいかなる作品にも見ることができない。そしてこのことは先生が抒情詩人と成り得なかった一つの原因であった。先生は主観の貴き理由を「文学論」その外の短かな論文や随筆文学の中で、繰り返して説いておられるにもかかわらず、先生自身はついに主観の人となり得なかったのである。

漱石先生はお若い時から理財の道に長けておられたのではなかろうか。そしてその性格が悪い意味においてで

なく、むしろ生活道に当然必要であるところの常識の一つとして、先生は経済ということに重心を措いて世をお渡りになったのだと私は想像する。そしてこのお考えは英国の紳士道に一致するものであって、決して日本式にいやしい人生観として排斥すべき性質のものではない。私か大学生であったころ、教室でしばしば先生の口から直接聴いていた言葉の中に「学者でも、教員でも、文学創作家でも、食べないでいるわけにはゆかない。昔の人が武士は食わねど高楊枝だとか、学者は物質欲から離れなければならないものだとか言うたが、それはやせがま

んというものだよ」とお話しになったことを今でも記憶している。そしこのお考えが今でこそなんでもないことと世人は考えるのみか、それは正直なまた真実な人生観だと誰でも考えるであろうが、今から四十数年の昔にありては、特に理想に生きようとしていた若い学徒の耳には、なんという物質主義の下等な人の言葉だと思われたものである。夏目先生が小説界に新たに踏み出される前に、日本の最高学府でこの大胆な言葉を繰り返されたことは、その結果において、決して先生のために有利でなかった。私たちはヘルン先生を理想的詩人として尊敬し

ていた矢先き、すなわち「お金のほしいものは文科に入らないで法科か工科か医科へ入学するがいい」と入学の当時忠告されたのを絶対的信条として守っていたのであるから、その後任者として来られた夏目先生の口から「お金がなくてどうして食べられるか。学者も教員も文学創作家も己が職業として好む道を選ぶのが当然なことだ。やせがまんは一種の虚偽だよ」と聴かされては心私(ひそ)かに公憤を抱かざるを得なかった。先生はこの正直な告白を学習院生徒の前でも率直になさったのである（前記）。また、先生はこれより先「英国の文人と新聞雑誌」と題

した論説文を「ホトトギス」誌上で発表された時にも同様のお考えであった。しかも、この論文は明治三十二年四月の号であったから、先生がまだ三十一二歳の、いわば、「武士は食わねど高楊枝」の理想主義でも標榜しておられるべきはずの若き学徒であったと考えられるが、事実はまったくこれとは反して、理財の方面に常識を持っておられたことを示唆している。すなわち先生はこのようなことを述べておられる。

「文人詩人の資格を具えておっても眼丁字なしというようなものは詩想を表彰することができぬから論外であ

る。文章を綴り句を成す力量があっても陶淵明や寒山拾得のような人々は自分の作を天下後世に伝えたいという考がないからこれも特別である。しかし一般に文学者と呼ばれまたみずから文学者と名乗るものは独りで、述作をして独りで楽しんでいるようなものはきわめて鮮(すくな)い。いわんや文を売って口を糊するという場合に至れば必ずなにかの手段をもって世の人に自作を紹介しようと企てる。新聞雑誌はこの紹介物としてすこぶる便利なものであるからそこで文人と新聞雑誌との関係が生じてくる。この関係を不秩序ながら少し述べようと思う」

この前置きで先生は英国のジャーナリズムの発達の歴史を解説しておられる。そして最後の結びとして次のごとく述べておられる。

「一括していえば初めの新聞紙は皆政治的のものである。政治的でないものも文学的趣味に乏しかったのである。それがだんだん発達して、あらゆる種類の文学が新聞雑誌の厄介になるという時代になった。これに連れて文学者と新聞雑誌との関係がようやく密接になってきて現今では文学者で新聞か雑誌に関係を持たないものはないようになった。というのが一編の主義である」

以上は先生が英国のジャーナリズムと文学者との関係を実例をもって説明されたものであるが、その目的とするところは世界第一のジャーナリズムの国たるこの英国が、いかにして民衆本位の大文学の国となったかを日本の読書人に教えようとお考えになったところにある。そしてこの事実は先生が何がゆえに大学の教壇を棄てて朝日新聞にお入りになったかを説明するものである。私はここに漱石先生の先見の明と、またその所信に向って勇進された決断力とに衷心から敬意を表するものである。日本の学者の中には今でもなお、帝国大学の教授の職を

最高の名誉として考えているものが相当に多い。しかるに夏目先生は今から半世紀前においてかくのごときばかばかしい迷信を棄ててすっぱだかで新聞社に飛びこまれたのである。そして帝大のスタッフを尻目にかけて先生独創の小説に永遠の光栄を獲得された。

漱石先生は「文学論」の中でも述べておられるごとく、文学の内容として道徳素材の重要なる所以を明らかに承認しておられた。しかしながら、先生は道徳そのものの伝統的また虚偽的仮面の根本的過誤を指摘することに毫末も仮借するところがなかった。先生がオスカー・ワイ

ルドの名句を借用して「炎天の下、重き甲冑を身につけて苦しそうに坐している者」の愚を嘲笑し、あるいはまた、『サロメ』の中の辛辣な句に

"They are the Stoics. The Stoics are people of no cultivation. They are ridiculous people. I myself regard them as being perfectly ridiculous"

〔Osear Wilde : Salome.〕

〔彼等は禁欲主義者だ、禁欲主義者は教養のない人間だ、彼等は嘲笑すべきへんな人間どもだよ、私はこういった人間どもを徹頭徹尾嘲笑的人物だと見ている〕……

『サロメ』より。

こういった考え方が、必ずしも夏目先生が古い人生観のあらゆるものに対して持っておられた思想傾向だとは称しがたいが、しかも私は先生がかつて私にお話しになったころ、しきりにオスカー・ワイルドの作品を推賞しておられた事実から推定して、オスカー・ワイルドの率直な表現手法にある程度の示唆を見出されたのではなかろうかとさえ想像する。オスカー・ワイルドが『つまらぬ女』（"A woman of no importance"）と題する劇文学の中で「叡知以外に人間を上品にするものはない」……す

なわち

"Nothing refines but the intellect"

〔"A woman of no importance," Act III.〕

と書いているが、これもまた漱石先生の「男女間の恋愛は叡知と理知を背景としたものでなければ芸術的価値に乏し」というお考に一致したものがある。漱石先生の「愛」の観念は情炎を含んでいない。理知によりて冷却された「愛」である。

漱石先生は明治年間に日本が生んだ文学創作家の一人として異色あるものであった。露伴、紅葉、美妙、逍遥、

鷗外、藤村等々は皆大きな業績を後世に貽した。そしてこれ等は皆それぞれの立場において多くの作品を残した。漱石先生もまたその一人であった。しかも漱石先生と鷗外とはこれ等の文学者の中で、最も多く西洋思想を研究した文豪であった。そしてこの二人の文豪は西洋の文学者の思想について深い知識を持っていたにもかかわらず、これ等の思想を鵜呑みにしてこれを日本の文学に直訳するようなことはなく、巧みにこれを消化して己が作品中に取り入れたのである。ゆえに後世漱石と鷗外を詳細に研究しようとする学徒があるならば、この両者の

西洋思想を一応検討する必要がある。この用意なくしてこの二人の文豪をかれこれ批評するのは無理である。

小説家として漱石先生の傑出している点は心理的描写にある。おそらくわが国において近代人の持つ精神作用のその複雑多様の心理的推移の跡を詳細に考察してこれを小説の構想理念としたそのそもそもの創始者は漱石先生であったと思う。もちろん古い時代にありてはすでに『源氏物語』の作者は西洋にも珍しい心理的描写を試み

ている。特にかかる古い時代に複雑した日本女性の心理を詳細に把握して精緻巧妙な写実的描写を試みたことは、実に日本文学のために誇るべきものだと考える。西洋ではこの時代は文学がなお幼稚であって、心理的描写を恣にした大文学のごときは一つもなかったのである。しかれども『源氏』の心理描写は上流社会の女性を対象として試みられたものであるがゆえに、いわば日本女性の全体的心理の共通性に触れることができなかった。これに反して漱石先生の心理的描写は近代人の持つ共通心理を取扱ったものである。そして漱石先生の場合は日本

女性よりはむしろ日本育年層、特にインテリ階級を代表するところの学徒ないし学徒的性情を持っている青壮年層の共通心理を取扱ったものである結果、『源氏』に比してはるかに将来性を期待するものであった。

漱石先生のこの心理小説はもちろん先生の独創にあったことではあるが、しかも先生にこの新らしい創作意図を与えた間接的示唆は英国女流作家エリオットとジェーン・オースティンであった。またその客観的見地に立ち人性を批判的に考察しようとする先生の態度は疑いもなくデ・クインシーであった。私はこの三人の第十九世紀

英文学界の作家は、漱石先生に最も大きな思想的影響を与えた人々であったと想像する。そしてこの事実は先生が「文学論」の中や、また私たちのクラスでしばしばお話しになった言葉の中でも明らかになっている事実である。なかんずく先生はエリオットの作風に非常に感心しておられたことは明らかな事実である。エリオットは『サイラス・マーナー』や『ロモーラ』等の小説において心理小説の最初の試みをやり、特に『ロモーラ』において、大成功を成した巾幗（きんかく）作家であった。エリオットの心理小説は英国文壇における前後に比類なき大成功を博したも

のであって、エリオット以前に『ロモーラ』はなく、エリオット以後今日に至るも『ロモーラ』がないとさえ言われている。ジェーン・オースティン女史もまたエリオットに劣らざる心理小説の大家であった。しかしながら、オースティンの取扱った作中の人物は英国中流社会の女性が主たるものであった。そしてその手法は英国中堅階級の家庭に流れている常識道の批判に重点を措き、かつ綿密精細に中堅女性の心理状態を写実的に描き出そうとしたところに特色を持っていた。したがってエリオットに比すればその取材の範囲は非常に狭かった。デ・クイ

ンシーは洗練暢達の麗わしき文章とまた犀利な洞察力をもって人生の秘奥を徹見したところに驚くべき長所を持っていた。漱石先生はデ・クインシーの霊筆から大きな示唆を行文のうえに得られたのではなかろうか。そしてこれ等の示唆を日本化するために先生の豊富な漢籍の造詣が役立ったことは言を俟たずして明らかである。

エリオットは先生の最も愛読された作家である。先生が明治三十六年初夏、初めて東大で英語のテキストをお用いになった時、エリオットの『サイラス・マーナー』をお撰びになったのもこの間の消息を物語るものであ

る。エリオットはすでにハットンが批評したごとく「単に小説家といわんよりは小説家以上の資格を持ったもの……すなわち小説家兼詩人」であった。すなわち

"The great authoress who calls herself George Eliot is chiefly known, and no doubt deserves to be chiefly known, as a novelist, but she si certainly much more than a nevelist in the sense in which that word applies even to writers of great genius — to Miss Austen or Mr. Trollope; may, much more than a novelist in the sense in which that word applies to Miss Bronê, or even

to Thackeray; though it is of course true, in relation to all these writers, that, besides being much more, she is also and necessarily not so much."

[みずから称してジョージ・エリオットと呼んでいる大閨秀作家は一人の小説家として主として識られているのみならず、疑いもなくそのように考えられるだけの値打ちがある。しかれども彼女はかの非凡の作家たるオースティン女史やトロロープ氏にすら適用されている小説家という言葉の意味におけるものよりは明らかにより以上のものを持っている。いな、それどころか、ブロンテ女

史もしくはさらに一歩を進めて、サッカレーにすら適用されているところの小説家という言葉そのものの意味における場合よりは、さらにより以上のものを持った作家である。もちろん、これらのすべての作家との関係において、エリオットはより以上である以外にこれ等の作家と同様のものを彼女もまた持ち、したがってそれが必然的に彼等と同様のものであったと称することができないのは、もちろんの事実ではあるが……」

すなわちエリオットは小説家にしてまた詩人の性格をたぶんに有していたが……換言すれば彼女は小説家以外

に詩人としての豊富な想像や情熱や特にまた崇高な性情を有していたから、いわば、彼女の精神は単なる小説家とは甚しく異なっていたが、しかし、それだからといって彼女はブロンテ女史やサッカレーに比してより大なる小説家であったという理由にはならない。すなわちエリオットは文学者としての大きな精神を持っていたが、小説家としてはブロンテ女史やサッカレーに劣るところがあった。

夏目先生がエリオットを激賞しておられたのは、エリオットの文学者としての詩人的性情ではなくむしろ心理

的描写に巧妙な点にあったのだと考えられる。エリオットの小説家としての長所は漱石先生に言わせるならばブロンテ女史やサッカレー以上であったということになる。先生にとりてはエリオットの詩人としての貴き性情は必ずしも重きをなしてはおらなかった。先生のお認めになったのは次の批評の妥当性であったと思う。

"What is remarkable in George Eliot is the striking combination in her of very deep speculative power with a very great and realistic imaginatiot. It is rare to find an intellect so skilled in the analysis of the deepest

psychological problems, so completely at home in the conception and delineation of real characters. George Eliot discusses the practical influences acting on men and women. I do not say with the ease of Fielding — for there is a touch of carefulnes, often of over-carefulness, in all she does — but with much of his breadth and spaciousness; the breadth and spaciousness, one must remember, of a man who had seen London life in the capacity of a London police magistrate."

〔ジェーン・ヒコックスによって議論された深淵なる問

索力と非常に大きなまた写実的想像力……夢想的あるいは抽象的想像力とは異なったもの……とを巧妙に結びつけるという点にある。心理上のいかかる深遠玄妙の問題でもこれを分析解剖するに当ってかくまで老練熟達した叡知を有し、また実在人物の真相に精通し、かつこれを描写するに当ってかくのごとく正確を期し得る作家は古来希れである。ジョージ・エリオットは男女に及ぼす実際的感化の力を論議する。しかしながら、私は彼女はフィールディングの暢達軽快の筆致をもってこれを論述するものだとは言わない……何ゆえというなら、エリオッ

トは作中の人物を描くに当って用意周到にもすこぶる慎重の態度をもってこれに臨み、時としてはあまりに慎重にすぎることがしばしばあって、これは彼女の常套手段であるからだ。しかしながら、エリオットはフィールディングの観察の広汎濶大なものを持っている。しかも彼女の持つ広汎濶大な観察的視野はちょうどロンドンの警察官の資格でも与えられて、ロンドン生活をつぶさに視察した人の持つその大きな広い観察力であることを我々は忘れてはならないのだ。」

エリオットの『サイラス・マーナー』は心理的に発展

してゆく無知の人間が幾度か悪人に欺かれて、己が多年苦労して貯えたわずかばかりの金をことごとく失ったにもかかわらず、忍耐に忍耐を重ねて、そのたびごとに自己本位の志を固めて、勤労によりて再び貯えた金の累積を眺めつつ、いっさいの苦しみを忘れていたが、最後に、雪の夜一人の可憐な孤児がよちよちと彼の墓穴のごとき冷たき茅屋に迷って来たのを見るや、ここに人間的本性の復活を見、ついにこの幼き女児のためにみずから生みの親たらんことを期し、それより後の彼の人生観は、まったく基督の愛の心によりて生きることとなったという

小説である。ゆえにこの作はその描写の手法は、作中の主人公の心理描写にあるのは明らかではあるが、しかも、それは必ずしも主人公の複雑な心理の解剖ではなく、それは単なる基督教精神への復帰を目差しての単純な記録に外ならない。

『ロモーラ』は前者に比してきわめて複雑な心理現象を取扱った作である。作中に現われてくる人物はことごとく異った性格の持ち主であって、しかも、これ等の人物は外界の事情に刺激されるごとに、その心理が異なってくるのであるから実に複雑多岐の性格描写がここに展開

されている。しかもエリオットはこれ等の性格をきわめて巧みに発展伸長せしめ、実に快刀乱麻を断つといったあざやかさで一つ一つ解決をつけている。かんごうにエリオットほど人間の各種類の性格をつぶさに知り、またこれを心理的に解説し得た小説家は世界に多くはなかったと考えられる。彼女の非凡な叡知とまた科学的分析力とは彼女をして『ロモーラ』を大成せしめたものだと考えられる。漱石先生が『ロモーラ』に学ぶところがあったのは当然のことだと思う。

エリオットはかくのごとく分析的手法に長じていた。

したがってエリオットの一つの大きな癖は理知の目をもっていっさいを眺め、また精緻明細を期せんとする余り、往々にして小さなことにも理屈をつけ、一つ一つに説明を加え、しかも、それがあまりにくどくまたあまりに長くなるという欠点がある。そしてこの弊は漱石先生と類似している。

『ロモーラ』の中に出てくる少年タイトーと称するものが己が父の行方を尋ねに行くべきか、それとも自己の利欲愛欲の念に従って、一身の利益を計るべきかについて自問自答している有様が、エリオットならでは容易に描

写し得ざるものがあるが、かかる場合にもエリオットは幾度も同様のことを繰返して述べている。曰く

"Do I not owe something to myself?" said Tito, inwardly, with a slight movement of his shoulders, the first he had made since he had turned to look down at the fiorins. "Before I quit everything, and incur again all the risks of which I am even now weary, I must at least have a reasonable hope. Am I to spend my life in a wandering search? I believe he is dead. Cennin was right about my florins: I will place them in his hands

to-morrow."

〔タイトーは内心に自問した……両肩を少し動かしながら……「私は何にか自分自身というものに対して尽すべき義務があるのではなかろうか」……これこそは彼が目を下向きにして、金貨を見て以来はじめてやった動作であった。「私は今ですら自分ながら、もう倦み飽きているあらゆる危険を、また再び冒かそうとするに先だって、少くとも、それ相当の希望というものを持たなくてはならないのだ。そこでそれならば、私はどこというあてもなく流浪の旅に出て、一生涯父を探し歩くべきだか、し

かし、私は父親がもう死んでることと思う。センニイが例の金貨のことについて、私に助言したことが理由のあることだと思う。だから私は明日この金貨をセンニイの手に渡そうと思う……センニイの忠告に従って、この金貨を利殖のために預金することとし、父の行方に出立することは止めよう。」

タイトーの良心がしだいに鈍ってゆき、一歩一歩と利欲のほうへと陥ってゆく径路を心理的に描写しているところにエリオットの非凡の才を認めることができる。しかるにエリオットはこれだけの描写ではとうてい満足が

できなかったものと見え、さらに次のごとき理屈を加えている。漱石先生の書き振りとよく似ている。

"Under every guilty secret there is hidden a brood of guilty wishes, whose unwholesome infecting life is cherished by the darkness. The contaminating effect of deeds often lies less in the commission than in the consequent adjustment of our desires — the enlistment of our self-interest on the side of falsity; as on the other hand, the purifying influence of public confession springs from the fact that by it the hope in lies is forever swept

away, and the soul recovers the noble attitude of simplicity."

〔凡ゆる罪悪を秘密にしようとすれば、必ずやその下に罪悪的希望が隠れているもので、その不健全な伝染的生涯は闇によりてしだいに養われてゆくものである。悪事の及ぼす害毒の結果は、その犯した悪事そのものではなくてむしろいったん悪事を行えば、これを隠そうとする希望を不断に工夫按排するところにある。私利を図るに嘘言をもってするにある。これに反して公然罪悪を白状することが心を純潔にする力があるのは、けっきょく、

これによりて嘘言における希望が永久に一掃されるという事実から生じるものに似ている。そして霊魂は虚飾なき貴ぶべき態度を取り戻すのである。」

エリオットの小説は皆この口吻に満たされている。夏目先生の小説はエリオットの作品と同様に説明が長くかつ理知の言葉が多い。しかし、先生は宗教的信念と倫理観とを一元的に取扱おうと試みられなかったために、読者は先生から開き直った態度で叱られるような感じがなくてすむ。その代わり、先生の作品の奥に大きな宗教的良心のひらめきは欠けている。エリオットの心理的描写

は、常にその最後の目標を道徳と宗教との大きな力への発展を期待したところに置いている漱石先生の心理描写は「自我」の発展を期せんとするものの心理的推移に重点を措いている。エリオットは前記タイトーの良心がしだいに鈍りゆく有様を、きわめて心理的に解説すると同時に、タイトーが宗教的また道徳的観念の潜在意識に促されて、内心私かに羞恥の念に脅かされ、また目に見えぬ神の叱責に、私かに恐怖を抱いている有様を巧みに、また用意周到に書き加えることを忘れなかった。曰く

"Besides, in thifs irst disfinct colloquy, with himself

the ideas which had previously been scattered and interrupted had now concentrated themselves: the little rills of selfishness had united and made channel so that they could never again meet with the same resistance. Hitherto Tito had left in vague indecision the question whether, with the means in his power, he would not return, and ascertain his father's fate; he had now a definite excuse to himself for not taking that course; he had avowed to himself a choice which he would have been ashamed to avow to others and would have made

him ashamed in the resurgent presence of his father. But the inward shame, the reflex of that outward law which the great heart of mankind makes for every individual man — a reflex which will exist even in the absence of the sympathetic impulses tnat need no law, but rush to the deed of fidelity and pity as inevitably as the brute mother shields her young from the attack of the hereditary enemy — that inward shame was showing its blushes in Tito's determined assertion to himself that his father dead, or that at least search was hopeless."

「なおそのほかに、彼が今初めてはっきりと為した独語の中には、今まで彼が抱いていたあの散乱していたところの、そしてまた、断絶していたところの考えが、今やことごとく一つのものとなって集中したのである。すなわちあたかも私欲の細流がことごとく合流して一つの流と成ってきたようなもので、今までと同じ抵抗力をもってこれを防ごうとしてもとうてい防ぎきれなくなったのである。これまでタイトーは自分には資力があるのだから、そのお金を持って、いったんギリシアに帰って養父の運命を確めようかというような問題は、未決のままに

漠然と放任していたのであるが、いまや、彼はそのギリシア行きの考えは実行しかいことに決め、しかも、それに対して自分独りで断乎たる弁疏（べんそ）をすら為したのである。彼はいまや他人にこのような考えを公然と告白したならば、自分ながら恥じるような選択をしたのである。しかも、かくのごとき選択なるや万一将来父が再生してその身を現わしたならば、タイトーにとりては大いに赤面しなければならない選択であったのだ。しかし彼の内心の廉恥すなわち人類に備わりている大きな性情が各個人のために作っているあの外部的法則の反射……それは

あの獣類の母がその世襲的敵の攻撃に対して、必ずしもこの法則の命令がなくても、我が仔を保護するがごとき信実憐憫の行為となって現われて来る同情的刺激からではないにしても、必然的に人間の心の奥に宿っている良心の反射作用、換言すれば廉恥心と称するものが、いまやタイトーに生じてきた。彼は己が父がすでに死んだ、いな、死んでおらないにしても、その行方詮索は無用だから中止しようとまで心の中で言い張ったその態度に対してこの人間としての真実の同情心に富んだ心……すなわち悪を避け善に就こうとする廉恥心が、いかにも恥か

しそうに顔を赤くしてタイトーの心の中に現われてきたのである。」

人間の道徳的良心、人間の上帝に対する信仰の念、この二つの大精神はエリオットの心理的小説の生命であった。タイトーの私欲がいかにはばをきかせようとしても、常にこの二つの人間的良心の煩悶が、その実現を妨げようとする。エリオットはこの煩悶を詳細に描き出そうとするところに大きな努力を払ったのである。そし彼女は成功した。英国心理小説家の中で、いまだかつてエリオットのごとき綿密正確な心理的考察を作品の中で試みた

ものはなかった。しかしながら、エリオットの理知は己が叡知に捉えられて、往々にしてあまりに分析的でかつくどくどしい描写をすら為した。漱石先生はエリオットの作風に学ばれた点が非常に多かったと私は想像する。作中の人物の取扱い方はエリオットの筆致によく似ている。理屈好きで、くどくどしく説明するあたりにも二者共通の欠点がある。しかしながら、漱石先生は宗教と道徳とについて決して説教じみたことをお述べにならなかった。先生の理屈は常に学者としての立場においてであった。大学の教壇の講義の延長そのものが先生の小説に

反映している。先生は小説、随筆、評論においてこの理知の表現を明らかにしておられるのみならず、英詩の小編においても、新体詩においても、漢詩においても、いな、俳句のごとき短詩形のものの中においてすら理屈癖を現しておられる。

叡知と感覚の鋭利なメスを持っておられた漱石先生は、日本小説界に高級文学を創始された文壇の功労者である。わが国の知識界は永久に先生の業跡に対して、感謝の念をささげることとなろう。実に漱石先生によりて本邦の小説は、英国型の上品な、理知的な、そして批判

的な写実文学を初めて持つことができたのだ。先生の小説が永遠に本邦の知識層に愛読されるであろうことは明らかだと思う。

（昭和二十三年刊、『人間漱石』）

日本文学電子図書館

漱石と英詩英文学

著　者　金子健二
制作者　宮澤一郎
底　本　「漱石全集　別 巻」角川書店
昭和42年10月10日５版発行

日本文学電子図書館